

園長先生の子育てひろば

令和5年12月



あ・と・ぼ

園長 山中 文

ある日の登降園で正門に立っておりました時のことです。園児をクラスに送ったお母さまが、未就園の弟ちゃんを連れて帰っていかれようとしていました。すると、弟ちゃんが私ににこにこ「あ・と・ぼ」「あ・と・ぼ」と声をかけてくれたのです。「遊ぼう、と言っているのかな、でも、はじめて話しかけてきてくれたくらいだから、遊ぼう、と言っているわけではないだろう？ あとぼって、はて??」と思っていたら、お母さまが「アストロボーイって言っています。鉄腕アトムが好きで、見に行つて」と教えてくれました。「あー、アストロボーイを見に行つてきたんだね」と言ったら満面の笑顔になりました。

子どもは、1歳半から2才ごろになると、できごとを語るができるようになります。でも、そのほんの初期はことばしかできません。発されたことばを周囲の大人がその子の背景から読み取って、お互いの理解がつくられていきます。親しく安定した関係でないとわからない、まさに親子の特権のような理解ですね。

そのようなことばは、次第にお話になっていきます。自分が体験したことを自分で語る、いわゆるナラティブとして発達していきます。「あ・と・ぼ」が「あ・と・ぼ、見た」「○ちゃん、ママとあ・と・ぼ、見に行った」というように、だんだん周囲が背景から読み取らなくても理解できるようになっていくので、その変化を見ていくことも、子育ての楽しいことです。

ところで、親子でも背景を読み取れないことがあります。以前、こちらでも書いたのですが、下の子が2才の頃、園で遠足に行きましたのでお弁当をつくりました。帰ってきて、「お弁当おいしかった？」と聞くと「うん」というので、続けて「何がおいしかった？」と聞くと、「うさぎ」と答えたのです。

「うさぎ？ ウサギ？ うさぎ？」とことばが頭をめぐりました。どう考えても何から「うさぎ」になったのかわかりません。「うなぎ？」と聞いても違うといひますし、遠足のお弁当に鰻を入れるなんてこともありません。ヒントが欲しくて、おそろおそろ「うさぎのお耳は長かったの？」と聞いたら、「長かったら（お弁当箱に）入らん」と、ものすごく現実的な答えが返ってきました。その後は、何を聞いても「うさぎ」の一点張りでした。

この「うさぎ」の謎は20年以上経っても解決されていません……。こんなことはあまりないでしょうが、日常の中でも、何を言っているのかわからないなあと思いながらその子の行動をじっとみていると、「ああ、そうか」と見つけることがあります。そして見つけて子どもと共有した時は、とてもうれしいものです。